

平成10年第1回7月8日

演題：無気力で不登校の学生とアイデンティティ

演者：高橋 俊彦（保健科学部）

大学生にも「不登校」はあり、一般にスチューデント・アパシーと呼ばれている。ここではスチューデント・アパシーの2例を呈示し、アイデンティティとの関連を考察した。

スチューデント・アパシーとを最初に問題にしたアメリカのウォルターズ (Walters P. A. Jr.) は、主として学業に限定して無気力、無関心を呈する学生例を記述し、その特徴を的確に描いている。

笠原もこのタイプを理念型として、これを「退却神経症」と呼びその特徴を入念に整理した。

彼によれば、症状としては、①無気力、無関心、無快楽。②主として“本業”（学生の場合は学業）からの退却。③無理矢理本業に参加させると、「不安」が出現する。④本業から退却させるとこの「不安」は目立たなくなる。⑤本業から退却することによって周囲の期待を裏切ることになるが、これに無関心である。⑥「陰性の行動化」がある。暴れたり暴言を吐いたりというあからさまな攻撃とは違い、本業をしないという「行動」によって、家族や、教師など本人に期待する者たちを失望させるといふいわば「陰性の」攻撃性をもつ。

心理的なダイナミクスとしては、①オール・オア・ナッシングの機制がある。強迫的、完全主義的な性格を持っている。②アイデンティティの混乱。自分がどうあるべきかという確たる信念をもちらながら日々の生活を送るという人は一部の人であって、多くは漠然とこんなところかなと思ってか、それさえも意識せずに暮らしている。しかし強迫的、完全主義的性格の人はそういう「中途半端な」意識では納得できず、結局何をしていいのか分からぬことになってしまうということである。③優勝劣敗への過敏さ。負けることに耐えられず、負けることが予想される場面は予め避けてしまうのである。

エクリソンのいうアイデンティティ (ego identity) は、「自我同一性」「自己の存在証明」「独自性」「自分らしさ」などと種々に訳されている。訳しにくいが現在ではそのままアイデンティティともいわれる。自分で歩んでいる道が、自分の属している集団に認められ、自分も納得できる方向に向かって進んでいるという感覚、というような意味である。人間は常に新たな自我同一性を求めているが、青年期にはそれが格別の重要性をもつ。

山田は、アイデンティティの拡散がアパシーの原因のようにいわれるが、むしろ結果であって、「おれは秀才だ」という才能にかかるアイデンティティの挫折が引き金になり、自信をなくし将来にかかるアイデンティティが定まらず、気力がよみがえらず悪循環を繰り返すのだと述べているが、どちらが先かの二者選択的なものではなく、青年後期の問題となりがちなアイデンティティの不確立がスチューデント・アパシーの準備状態をなし、またスチューデント・アパシーがアイデンティティの不確立を一層深刻化させるという悪循環を形成すると考えた方が自然であるようと思われる。

治療を始めるにあたって、具体的には学生に起こっている事態が、生得的な劣悪、怠惰、無価値、無能などの結果でないことをわからせると同時に、現在の状態が一時的なものでありやがて過ぎ去るものであることを認めてやることにより、学生を勇気づけることが大切である、とウォルターズは述べている。

私見を付け加えるとすれば、2例ともに言えることであったが、精神安定剤、睡眠剤、等の薬物を効果的に使用することも多くのケースにおいて有効である。